

「岡本さん、前回の時の声は、ちよつと言葉を選びながら話している慎重さがあつたけど、今回の声は、心が開いているような開放的な声で聞こえますね。」

「僕と岡本さんの精神的な距離が、うんと縮まった感じがします。」

「信頼感が、どんどん高まっていますよ。自己開示は信頼の証ですからね。」

「本当に安心できる人間関係とは、どれだけ自分の弱さを開示できるかで計れます。」

「だから、相手に謝るといふことは、大きな信頼を生みます。」

「今回、岡本さんは、お嬢さんに謝りましたよね。」

「部下の人にも信頼して任せなかったこと、自分で全部抱えてしまったこと。先入観というめがねで見えていたことなどについて、謝罪したでしょ。それが信頼を生んだんです。やりましたね。」

星野は、和美の前回からの変化をすっかり感じ取って返していた。人は、自分の成長を感じる時一番成長する。

コーチは、本人が気づかない成長を観察して伝えてくれる。

その人が目標・目的に向かって進んでいるときの変化や成長を、その人に返ししてあげるギフトのようなものらしい。

「岡本さん、いっぱい経験しましたね。その体験も活かして、次はどんなプチ目標を立てましょうか？」

「目標とは、目指す標と書きます。地図の上での次の通過地点です。」

「人は、目標というと評価基準と勘違いする人がいるんですよ。」

「まあ戦後の流れからすると仕方が無いですけどね。」

「目標を評価基準にしてしまったので、達成したか未達かでその人の価値を決めてしまうことが起きた。」

「人はその他者評価を恐れるようになり、目標を立てなくなりました。」

「目標を立てることが恐くなったんです。ならば目標を明確にしないのが安全だと学習したのでしょね。」

「そうではなくて、目標を立てると、そこへの道のりが変わると思うんです。つまり、目標を立てることは今を変えることなんですよ。」

「ある人が言っていました。『人生とは目標に向かう道そのものである』と、目標を達成したかどうかは人生ではなく、どんな道を歩いて来たかが人生なんだと思うんです。」

「だから、目標を恐れなくてください。」

和美は、目標を立てることを、いつの間にか恐れていた自分に気づいた。

星野は、そんなの後天的に学習したことだから、大丈夫。

後天的な学習で身に付いた事は、いつでもその後の学習で変えられると言った。

星野は、時としてコーチであり。

時としてメンター（助言者）になってくれた。

和美は、この1週間ですでに予定していた、室井と山口の話を書くことを目標にした。

それと、その先には、残りのメンバーとの個別の面談も目標にした。

チームの起動が、本来の目的に少しずつ戻っていることを和美もメンバーも感じ始めていた。

和美は、リーダーの役割の一つが、

目標を明確にする。

目的を明確にする。

その道すじで、軌道修正をすることだと学習した。

和美は、メンバー一人ひとりとじっくりと話をした。

話したというより、改めてメンバーの一人ひとりに関心をもって、それぞれの可能性に興味を抱いて話を聞いた。

「彼は、どんな物語を持ってここにきたんだろう？」

「彼が得意とすることは何なんだろう？」

「私や、他のメンバーには無くて、彼にある強みは何なんだろう？」

明らかに今までの人に対する光のあて方、関心の向け方が違っていた。それは、和美の子どもや、真也。さらには、他の人間との関わりにも現れていた。

この子が、この子であること、自分を信じて力強く生きていくこと、誰かの助けになること、それだけを願っている自分に気づいていた和美だった。

そして、その為に、和美ができることをしてあげようと決めていた。

2人のこの子たちのために母であり、コーチになろうと・・・。

何回かの星野とのセッションを通じて、和美は質問のパワーを感じていた。

和美が誰かに投げかける質問。

和美が自分に投げかける質問。

その質問によって、その先の思考の旅は大きく方向を変えるのを知った。

星野が助言してくれた。

部下を育てるとは、教えるではなくて、考えさせるということ。

そのためには、部下に対する質問力を磨くといふこと。

和美は、春先に出た星野の研修を思い出していた。

マジッククエッション

相手を活かす質問は、相手の中に秘められた可能性を引き出すカギのようなもの。

コーチが使う質問はすべて相手のための質問。

無意識下で投げられる質問は、自分のための質問。

自分が知りたい情報を得たいための質問。

それは、「判断したい」「評価したい」「アドバイスしたい」「答えを教えたい」「自分の立場を守りたい」「忠告したい」「優位に立ち

たい」「コントロールしたい」といった欲求の表れ。
結局相手のためと思っても、自己満足で終わる場合がほとんど。

人は、自分の言葉を信じる。

自分の言葉に納得する。

自分から生まれた言葉を愛おしく思う。

「教える」は、あくまで教えるのであって、育てるとは違う。

「育てる」とは、自ら考え、自ら生み出す力をつけられる環境を整えてあげること。
コーチは、質問でこの環境を作り出す。

相手のために質問を贈る目的。

- ★大切なものに気づくため
- ★物事を具体的にするため
- ★目標に向かう地図を描くため
- ★自分を強く惹きつける「ないたい自分」を見つけるため
- ★抱えているものの重みをはっきりさせるため
- ★物事の優先順位を決めるため
- ★相手の立場が理解するため
- ★事実と解釈の区別するため
- ★思い込みの檻から解放するため
- ★新しい何かを創造するため
- ★自分の可能性に思わすびつくりするため
- ★自分自身を知るため

相手のために質問は、貢献になる。

質問にあと、答えが返ってくるかどうかは大事ではない。
問われて思考の旅に出るその時間が大事。

その時間は人によって違う。答えを探しにいつても、探せない時もある。それはそれでいい。思考の旅に出たことは間違いないのだから。

その人は、いつか必ず答えを見つけて持ち帰ってくる。

和美は、研修のテキストを閉じて、室井と面談する会議室に向かった。

二段目

室井は、これまで実績を残すことで自分を確立してきたこと。自分にとっては結果がすごく重要なこと。

どちらかという和高い目標に挑戦することが好きなこと。

結果は出すので、やり方は信頼して任せてほしいこと。

これまで、和美が知らなかったことを、黙々と話してくれた。

「室井さんにとって、今回のプロジェクトがどんな実績を上げたら達成感がある？」

和美の問いに室井は短い沈黙の後に力強い声で答えた。

「これまでの新商品の販売記録を塗り替えたいです。」

「この企画は絶対、市場に評価されると思います。」

「だから、販売の新規開拓を全面的に任せてください。」

「販売新記録ね。いいじゃない。それって、プロジェクトの目的の日本中の家族に笑顔を届けると一致するものね。金子部長の参ったという顔が見ものね。」

和美は、室井がこんなに情熱を持っているとは思っていなかった。勝手に表面的な態度からドライな人というレッテルを貼っていた。山口が赤い炎なら、対照的に青い炎の持ち主なのだ。

メンバーのことを知れば知るほど、和美はチームとして目標に向かう醍醐味を味わっていた。

「山口君は、最高のムードメイカー」

「同期の深井さんは、山口君を盛り上げながら、モレやミスを影ながらカバーしている。それに、上手くみんなのバランスをとってくれる。」

「川本さんは、みんなで決めた決定事項の準備や情報をまとめて、裏方の後方支援は先手を打ってくれる。」

「室井さんが、そんなみんなをガンガン引っ張ってくれる。」

和美は、アイスのカフェオレを飲みながら、一人休憩室で考えていた。

誠の言葉を思い出していた。

サッカーはチームプレーで、それぞれがゴールに向かって、役割を果たしながら向かっていくことを。

今、和美のチームは、メンバーが強みを活かしながら、関係し合いながら、未知の力を発揮しようとしていた。

みんなが同じゴールに向きだした。

力がゴールに向かって集約された。

和美は、自分のリーダーシップは、引っ張り型ではなく、フォロワー型があっていると確信した。

主役はメンバーで、私はその力が最大限に発揮でき、影響し合える場を作ることだと思った。

「目的地は、あっちよ！」

「最後尾は任せて。」

「結果の責任は私が持つから、みんなは力を出し惜しみしないで、行動すると約束して。」

プロジェクトリーダーになって6ヶ月、経験を通じて和美は確実に成長していた。

出会いや大きなライフイベントをきっかけとして、成長曲線が大きく上向きになっていた。

マイ・コーチ

星野とのコーチングも最後の1回になっていた。研修で出会ってからは、5ヶ月が過ぎていた。

「岡本さん、おはようございます。」

「調子はいかがですか？」

「けっこう、いい感じですよ。」

「よかったです。声から伝わりますよ。」

「とうとう最後のセッションになりましたね。」

「提案なんです、最後なので、これまでの岡本さんの成果を味わうのと、次のゴールを明確にする時間にしませんか？」

「それが、いいです。お願いします。」

「じゃ、客観的に見て行きましょう。」

そうやって、星野は和美に、

ライフバランスチェックと、

成功方程式の数値と、

5つの資質の数値の現在値を聞いてきた。

ライフバランスの各ポイントは、明らかに高まっていた。

特に、家庭や人間関係は雲泥の差になっていた。

5つの資質も強化されている。

特に客観性は磨かれたように感じていた。

決断力も2ポイント上がった。

成功方程式は、今、感じている幸せ度合いでわかる。行動のスピードが変わった。決断力が磨かれたおかげだと感じた。些細なことにも、感謝する習慣がついた。間違いなく幸福感が高まっていた。

こうやってコーチと一緒に数値化することで、自分の事が客観的によくわかった。ここでも客観性の重要さがわかった。

「岡本さん、成長しましたね」

「人間、その気になれば死ぬまで成長できますからね」

「星野コーチ、本当にありがとうございます。」

「こちらこそ、これは、岡本さんが決断して、考えて、行動した成果です。」

「全部、岡本さんが持っていた力のおかげです。」

「お礼なら、その力をくれたお母さんとお父さんに感謝して下さい。」

「さて、岡本さんと一緒に進んできたプロジェクトのゴールは、もう少し先ですね。」

「なので、最高のフィナーレの為に、もう一度今から見るゴールのビジョンをイメージするというのはいかがでしょうか？」

「是非、そうしたいです。」

和美は、みんなまで進んできたプロジェクトのゴールシーンを早く見たかった。

「では、岡本さん、プロジェクトのゴールシーンを思い浮かべて、どんな景色が見えますか？」

思考の旅にでる楽しさを覚えた和美は、ゆっくりと未来の自分を探しにいった。

「星野コーチ・・・」

ゆっくりとした言葉だが、とつても自信と確信に満ちた声で和美は話し始めた。

「今、ゴールシーンを思い浮かべたら、とつても幸せに満ちた感情がわいてきたんです。プロジェクトのメンバーと泣きながら喜んでる姿や、家族のみんなが誉めてくれてる姿や、公園や色々な家庭で家族が笑っているシーンが浮かんできたんです。その場に、このプロジェクトのビスケツトがいつぱいあるんです。」

「岡本さん、僕にも同じ絵が見えますよ。」

「感動的なシーンのエンドロールみたい。最高ですね。」

「岡本さん、イメージは100万の言葉に勝ると言われています。」

「想像力は人間が持つ他の動物とは明らかに違う力です。」

「最高のゴールをイメージする。それもありありと鮮明に。」

「スポーツの世界では当たり前になった方法です。イメージが成功のカギですね。」

「さて、もう、僕は必要ないですね。」

「岡本さんは、もう自分にとっての最高のコーチに出会いました。」

「そう、あるがままの自分という最高のコーチです。」

「これからは、あるがままの自分が、あなたのコーチです。」

「自問の達人になれば、自分の人生のマスターになります。」

「さあ、ラストスパートです。」

「自分にどんな問いを問いかけましょうか？」

和美は、最後のセッションを終えても、しばらく会議室を出なかった。

今、ここから始まる一瞬の行動を決めたかった。

「私は、私のどんなところを誉めてあげたいの？」

「私が、誇りに思うことはなんなの？」

「私が、一番大切にしたこと、なに？」

「私が、感謝していることはどんなこと？」

「私は、誰を愛したいの？」

「私が、存在している価値は何？」

「私は、今、何ができる？」

「私には、どんな可能性が眠っているの？」

「私は、本当はどうなりたいの？」

「私は、最後はどんなハッピーエンドを迎えたいの？」

「さあ和美、何から始める？」

和美は、

「よしっ！」と一声かけて、早朝の会議室の扉を開けた。

エンドロール

大きな出来事とともに、日々道を選び進んでいく。それが人生かもしれない。

どんな道が正解か、それを考えていても前には進めない。

常に、どれかを選び、決断して、歩いていく。

そして、自分が選んだ道が正しくなるよう、今、行動する。

私が変わるとまるで鏡に映したように、周りが変わりだす。

真也が私を頼って話をしてくれる。

そして、私の話を聞いてくれる。

私が心を開く。由紀が誠が心を開く。

私が人を信頼する。人が私を信頼してくれる。

私が多くの人を愛する。たくさんの人が私を愛してくれる。

私が持っているものを与える。私に無いものを分けてくれる。

与えたことが、自分へのプレゼントとしてかえってくる。

結果は私が作り出した原因で変わる。

私ができる事は、大きな実をつける原因の種をまいて育てること。

あとは、どんな実がなるか楽しみに見守ろう。

そんな、穏やかな気持ちになれた和美だった。

共演者

「おとうさん！頑張って！」

陽に焼けた真也に声援が飛んだ。沢山のお父さん達の中でこぶしを突き上げた真也が光っていた。由紀や誠には誇らしく、和美には頼らしく映っていた。

「フレー！フレー！」

校庭のあちこちからそれぞれの家族が、自分達のヒーローに声援を送り続けた。

その声が、突き抜けた秋の空にこだましていた。

今日は誠の人生で二度とない小学生最後の運動会。

保護者と子どもの合同綱引き。
真也は誠と一緒に赤組の先頭で吼えていた。

「ウォー~~~~~！」

そこには、みんな自分が主役の物語の一編が書かれた風景があった。
和美は自分を大切にすることで、人を大切に思えるようになっていた。
自分の物語に由紀や誠や真也、そして沢山の仲間が必要だった。
そこに大切な人として存在し、物語を飾る役として大切だった。
同じように真也や、由紀や誠の物語にも、自分が大切な役として登場したかった。
物語がいくつも折り重なることで、とつても大切なことが出来上がること、和美は知った。

たくさんの家族の笑顔が満ち溢れていた。

ピストルの音と一緒に、

秋の空に、家族の歓声がこだました。

そこには、赤いパッケージのビスケットが光っていた。

室井は今日、追加注文の納期に間に合わせるために、北海道に飛んでいた。

山口は九州の販促の準備に飛び立った。

昨日、川本から発売1ヶ月目の記録更新の知らせが入った。

河合は次の開発リーダーになって分かれて行った。

金子部長のがさつな笑い声がかえって気持ちよかった。

心から、メンバーのみんなが、みんなに感謝していた。

和美は大きく成長していた。

スローモーションで、真也が両手を突き上げた。

由紀が抱きついてきた。

誠が自分の英雄を真似るように小さなこぶしを突き上げた。

赤組が勝った。

次のステージへ

「さて、目標は、最終地点じゃないですよ。」

「人生という道のりでは、目標は通過点です。」

「だから、目標のゴールテープを切るときは、次へのスタートでもあるんです。」

「これが人生の基準を上げて行くことになるんです。」

「ゴールに向かって登ってきて、7合目から8合目に来て初めて次の目標が見えてくる。それが成長曲線なんです。」

「さて、次は、どこへ向かいましょうか？」

数日後、和美は星野との最後のセッションで言われた質問を思い出していた。その時は、まだ、次のゴールが見えてなかった。

一人分の食事を用意している時、ちょうど真也がお風呂から上がってきた。

最近では、部下にだいたいぶ任せるようになって、早く帰って来る時がある。

それでも、なかなか子どもたちと一緒にの食事は難しい。

いっぺんに変えなくてもいい。できる事から変えていこうと2人で話した。

「今日は私の話を聞いてもらおう」そう心でつぶやいて、和美は真也に声に出してお願いした。

「ねえ、聞いて欲しいことがあるんだけど、いい？」と、冷たいビールを添えながら・・・
2人はチームを組む約束をした。

時々、お互い役割を交代すればいいと、和美と真也は気づきだしていた。それが、パートナーだという事を。

お互いが、主人公であり、
お互いが、コーチになればいいと決めた。

「あのね、私、昔は英語の本を読むのが好きだったの・・・それでね・・・」

「へへへ、そうなんだ。知らなかったなあ！」

和美は、会社に自分のキャリアプランを提出していた。

子どもの頃、あこがれていた外国の小説にあるような、おしやまな女の子をモデルにした商品を開発したくなった。
お母さんと娘と一緒に、夢を語れるような風景を家庭に届けたかった。

そのために、外国文化をもっと知りたかった。

日本のいいところも、もっと伝えたかった。

その両方を活かしながら家族が幸せになる商品をもっともっと多くの人に広めたいと心から思うようになっていた。
やりたいことが、堰を切ったように次から次へと出てくる。

目標は評価ではない。

和美は、星野の言葉を思い出していた。

私の人生のイベントはもつともつとあっている。

一つの目標を7合目まで上がってきた時、次の夢が見えてきた。

和美は、若草物語の原文を手にしていった。